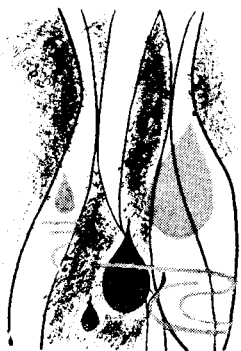


北海道において 保護すべき陸水*

徳井利信



近時、文化の進展にともない、自然が著しく汚染、破壊されてゆき、何らかの手段・方法を講じない限り、遠からず地表上から原始の状態は消滅すると思われる。

このことについては、早くから識者の間で憂えられていたが、わが日本生態学会も深い関心をよせ、1959年4月1日、とくに、その時点で、問題となっていた原生林保護を中心とした声明書を発表した（日生態会誌第9巻第2号参照）。そして、学会は自然保護専門委員会をもうけ、自然保護地帯の設定に努力してきたのは、会員諸賢のよく知られているとおりである。

これまでの成果は本誌第15巻第5号（1965年10月）にみられるとおりである。原生林保護地帯の選定は一応終了し、ついで、陸水保護地帯の選定に進んでいる。

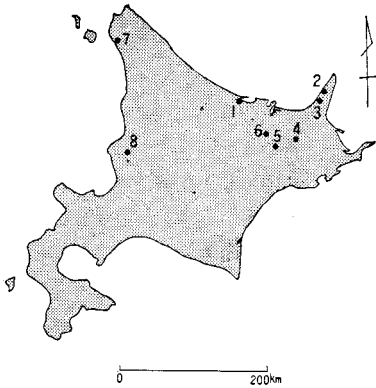
北海道地区においては、原生林保護地帯として、十勝川上流の針葉樹林が選定され、その900ha余が学術参考林として指定されることとなった。つぎの陸水について

は、これまで元田茂氏によって摩周湖と阿寒湖が要保護地として報告されていた。しかし、それらについての詳しい理由は附されていなかった。また上記の2湖沼以外にも保護を要すると考えられる陸水もあるので、北海道地区会では札幌在住の会員を中心とし、それに道内の陸水研究者の協力を得て、討議をかさね、北海道において保護すべき陸水の選定をおこなった。

選定の基準としては、(1)自然、または、それに近い状態に維持されている湖沼を、その状態に保つこと。(2)生態学的、あるいは、もっと広く Science の対象として重要な湖沼を、今日以上に失うことのないよう保護することの2つとした。これにもとづいて、北海道で図1に示した8地域を選定し、以下にそれらの概要と選定の理由を説明する。

* 本稿は日本生態学会からの諮問に対する答申書として起草したものであるが、一般の参考に資するため本誌に掲載した。

図1 北海道において保護すべき陸水



1. ルシヤ川・テツパンベツ川
2. 羅臼湖
3. 摩周湖
4. 阿寒湖
5. チミケップ湖
6. サロマ湖畔塩湿植物群落
7. 天塩ペンケ沼
8. 雨竜沼高層湿原帯

1. ルシヤ川（またはテツパンベツ川）

ルシヤ川と、その北方約500mにあるテツパンベツ川は、いずれも北海道知床半島の知床岳付近に源を發しオホーツク海に注ぐ。河川延長はテツパンベツ川が5.2km、ルシヤ川は4.5kmである。

これらの河川を保護する理由は、北海道の河川ではよく原始性を保ち、羅臼湖とともに知床国立公園地域にあって保護されやすく、なお、北海道の沿岸に回遊するサケ・マス類のすべての種類たるサケ (*Oncorhynchus keta*)・サクラマス (*Oncorhynchus masou*)・カラフトマス (*Oncorhynchus gorbuscha*) がそ上し、ヤマメ (*Oncorhynchus masou var. ishikawae*)・オシロコマ (*Salvelinus malma*) の生息もみられる。そのため、

これら魚類の生態研究の場としても利用でき、かつ河川延長が短かいため、環境の把握にも、さして困難をとまわらない。将来、基礎生物研究所の施設が亜寒帯に設置されたときは、研究河川として利用することをも考慮して保護することにした。

これらの河川については今夏、日本生態学会北海道地区会で調査の計画がある。その結果に基づいて2河川とも保護すべきか、あるいは、いずれかの1河川にすべきか決定する予定である。

2. 羅 臼 湖

羅臼湖は一名シニンベツ湖とも呼ばれたが、羅臼町役場によると羅臼湖が現在の正式の呼称とのことである。湖は北海道知床半島の中央山脈羅臼岳と遠音別岳の間に位置し、周囲約6kmで完全な原始状態に保存されている。

本邦の湖沼が多かれ少なかれ人為による変化を受けている現在、貴重な存在である。そのため保護すべき湖沼に加えた。

この湖の性状については、まとまった資料が少なく、そのため日本生態学会北海道地区会で今夏、ルシヤ川・テツパンベツ川とともに調査の計画がある。

3. 摩 周 湖

摩周湖は北海道東部にあるカルデラ湖で、その景観はよく知られている。海拔高度351m、面積20.0km²、最大深度212.0mで、流入河川も排水河川も全くない。

この湖を景観以上に有名にしたのは、1931年8月、北海道水産試験場によって測定された41.6mの世界最高の透明度である。しかし、最近、この透明度が低下し、

その原因について田村剛氏は雑誌国立公園(1956年3月号)の中で、この湖にマスを手放したことに、その原因があると述べている。しかし、摩周湖の透明度の低下をきたしたのは最近の現象で、マスの放流は遠く1926年に初まる。いま、摩周湖の透明度の変化と、想定される関係事項を列記すると下表の通りである。

下記からもわかるように、摩周湖の透明度はニジマスを手放してから20年間も変化なく40mを維持し、低下をきたしたのは十勝沖地震以後である。田村氏の言うように、マスの放流によったかどうかは疑問である。

摩周湖の生物は在来種としてはエゾサンショウウオ (*Hynobius retardatus*) のみで、ニジマス (*Salmo gairdneri irideus*) とスチールヘッド・トラウト (*Salmo gairdneri gairdneri*) が移植され、現在でも、この2型が見られる。また、この湖のザリガニは本邦で普通に見られるザリガニ (*Cambaroides japonicus*) でなく、米国から移植されたウチダザリガニ (*Astacus trowbridgii*) である。

本湖は阿寒国立公園地域にあり、湖畔周辺の森林は国有林で、割合に原始性を保存している。湖の水族は北海道庁によって管

理され、漁業組合による漁業権の設定はないから、すべての点において保護されやすい状態にある。

4. 阿 寒 湖

本邦のいくつかの湖沼でマリモ (*Aegagropila Sauteri*) の生息が報告されている。しかし、大きさも数量からも本湖産が最も優れている。このマリモも、阿寒湖を水力発電に利用するようになってから、水位の低下により冬季間に湖面に露出して枯死したり、夏季にマリモ見学のための遊覧船による湖水のかく乱などのため、これ以上の人為的な破壊を防止するため保護湖沼とした。

本湖は、また本邦におけるヒメマス (*Oncorhynchus nerka var. kennerlyi*) の原型を産したが資源量が激減し各地の湖沼から移植して、その原型はつとに失われた。

5. チミケツブ湖

チミケツブ湖は、北海道の東部、北見市の南方約20kmの網走郡津別町の高抜307mの山中にある。

面積は0.98km²、最大深度21.3mで湖沼

測定年月	透 明 度	観 測 者	関 係 事 項
1926.4			ニジマス 13,351尾放流
1927.5			ニジマス 5,375尾放流
1928.3			ニジマス 17,395尾放流
1929.7			スチールヘッド・トラウト 13,450尾放流
1931.8	41.6m	北水試	
1946.6	40 m	三原	
1952.3			十勝沖地震
1952.7	29 m	桜井・その他	
1953.6	29 m	桜井・その他	
1954.6	27~28m	黒萩・甲斐	
1954.9			洞爺丸台風

標式は中栄養型の範ちゅうに入ると思われる。

この湖には小型のマリモ (*Aegagropila Sauteri* var. *Borgeana*) を産したが、最近の調査では発見されていない。またヒメマスの原型を産したが、支笏湖から移殖したため、その原型は不確実なものとなり、しかも最近では激減して生息が確認されている程度に過ぎない。

本湖は比較的人為によって影響されることが少なく、湖畔周辺の森林植生は道有林としてよく保護されてきており、また湖水は発電やかんがいによる人為的な水位の変化がないため、沿岸の水生植物はよく発達している。将来、生態学の実験湖として利用しうることも考慮して選定した。

6. サロマ湖畔塩湿植物群落

サロマ湖は北海道東北部のオホーツク海岸にあり、面積149.2km²の北海道第一の大湖である。湖水の塩分は海水に近く、生息生物も海と異ならない。

この湖の沿岸には塩湿地植物群落を代表するアッケシソウ (*Salicornia europaea*) の群落に富み、とくに群落的に最もすぐれているテイネイ鶴沼のアッケシソウの群落は1957年1月1日付で北海道天然記念物に指定された。

サロマ湖の湖水そのものでなく、湖畔の塩湿地植物群落の保護のため選定した。

7. 天塩ペンケ沼

ペンケ沼は北海道の北端、稚内に近い日本海側サロベツ原野の泥炭地域中に存在し、面積2.73km²、最大深度1.5mで水蘚湿原地から滲透する泥炭地水で涵養されてい

る。

この沼にはヒブナ (*Carassius auratus*) と鉄魚が多数生息する。これらの魚は北海道各地の湖沼で発見されるが、この湖のように多く生息するのは珍しい。そのため、これらの魚類の保護を目的として選定した。しかし、この湖には漁業権が設定されて、漁業が行われているから、今後、これらの点について調整を行わねばならない困難性がある。

北海道のヒブナの生息地として、釧路市の春採湖が天然記念物に指定されていた。しかし、市の発展にともない湖が荒廃して、最近では、その生息が確認されないと言われる。

8. 雨竜沼、高層湿原帯

雨竜沼湿原は北海道の中央西端、暑寒別岳の山腹、海拔約850mの高地にあり、東西約4km、南北2kmに及ぶ高層湿原である。

その概要について、北海道庁の暑寒別道立自然公園調書(1962)によると、"湿原中には小は1mから大は50mに及ぶ百数十の池塘があり、また堀川が縦横に蛇行している。池塘の水深は0.75mから1m位のものが多く、中には大池塘では4mに達する。形状は円型のものが多い。水は透明であるが底は褐色を呈している。この湿原はミズゴケを主とする高位湿原で湖沼—平原に変化する経過と泥炭形成の推移がよくわかる。また高山性植物と湿原性植物が混交分布して学術上、日光国立公園尾瀬ヶ原と共に貴重なものといわれる。"

選定の理由は、北海道で珍しい高層湿原で、しかも、北海道の天然記念物に指定され保護されやすい状態にある。